

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02394

研究課題名(和文)シネフィリーの時代におけるフランス映画批評の総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study of French Film Criticism in the Era of Cinephilia

研究代表者

堀 潤之 (HORI, JUNJI)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80388412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、映画批評家アンドレ・バザン(1918-1958)の多面的な仕事のうち、これまで相対的に知られていなかった側面を、存在論的リアリズム、脚色、修辞学、映画批評といったキーワードに即して解明するとともに、バザンも含めた古典的シネフィリーの時代における批評が、後続世代の批評や実作にどのように継承されているのかを、レオス・カラックスの批評やストロブ/ユイレの映画などのいくつかのケーススタディを通じて明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでも『映画とは何か』の邦訳等によって日本の読者に知られてきた映画批評家アンドレ・バザンが、古典的シネフィリーの時代においてどのような多面的な諸問題に向き合っていたのかを精緻に掘り下げた点において、またバザンの未邦訳の記事を多数翻訳紹介し、バザンも含めた21人の映画論者たちの思考を概説する一般書『映画論の冒険者たち』を刊行するなど一般読者層への啓蒙にも務めた点において、一定の学術的・社会的意義を有すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study has explored, on one hand, the relatively unknown aspects of Andre Bazin's multifaceted film criticism by translating and annotating hitherto untranslated texts concerning the ontological realism, adaptation, the rhetoric of the image, and filmology. On the other, it has also examined how film criticism from the era of classical cinephilia has been carried over into the criticism and actual productions of later generations, taking into consideration, among others, the early film criticism of Leos Carax and the filmmaking of Jean-Marie Straub and Danielle Huillet.

研究分野：映画研究・表象文化論

キーワード：映画批評 映画理論 アンドレ・バザン ジャン＝リュック・ゴダール

1. 研究開始当初の背景

シネフィリー(映画愛好)の時代(1944-68年)におけるフランス映画批評とその影響を総合的に再検討しようとする本研究には、以下に示すように、互いに密接に関連する3つの学術的背景がある。

第一に、映画研究の分野でここ数十年にわたって、「理論から歴史へ」というトレンドの移行が生じていることが挙げられる。1960年代にひとつのディシプリンとして確立した映画学(フィルム・スタディーズ)では、1970年代にかけて、クリスチャン・メッツを立役者として記号学と精神分析に基づく独自の映画理論が築き上げられたが、1990年代以降、理論の支配的な地位が相対化されるとともに、実証的な研究によって映画史的な厚みを復元する作業も広範囲にわたって行われるようになった。フランス映画研究におけるそのメルクマールとしては、『カイエ・デュ・シネマ ある雑誌の歴史』(Antoine de Baecque, *Cahiers du cinéma: Histoire d'une revue*, 1991)をはじめとするアントワヌ・ド・ベックの一連の著書が挙げられる。研究代表者が以前に翻訳した『ゴダール伝』(みすず書房、2007年)も、かつて「理論」を推進した人物のひとりであるコリン・マッケイブが、ゴダールの作品と人生を文化史的な観点からコンテクスト化した仕事であり、このトレンドの移行を象徴的に表している。

第二に、上記の動きとも関連して、本研究が中心的に取り上げる時期における最重要の映画批評家・理論家であるアンドレ・バザン(1918-58)への関心の高まりがここ20年ほど顕著にみられることが挙げられる。「理論」の時代においてバザンのリアリズム論は、言語の網を介さずにとらえられる「現実」なるものをナイーヴに想定しているとして批判されたが、支配的な「理論」の呪縛が解けた2000年代以降、ダドリー・アンドルーやエルヴェ・ジュベール=ローランサンを中心に、大量にある単行本未収録の文章の掘り起こしと並んで、リアリズム論だけでなく、脚色論、メディア論、比較芸術論にまでおよぶバザンの理論的射程の再検討が進んでいる(研究期間中の2018年には、フランスで『バザン全集』も刊行された)。この流れに倣って、研究代表者もバザンの最初の書物である『オーソン・ウェルズ』(インスクリプト、2015年)を訳出しており、その際、1945年から50年までの『市民ケーン』をめぐるフランスでの論争の過程をつぶさに調べて「訳者解説」を書いたことが本研究の着想源のひとつになっている。

第三に、シネフィリーという映画視聴の歴史的様態に対する近年の関心の高まりが挙げられる。本研究が主たる対象とする時代の画定は、ド・ベックが著書『シネフィリー』(Antoine de Baecque, *Cinéphilie: Invention d'un regard, histoire d'une culture 1944-1968*, 2003)でシネフィリーというまなざしのあり方を1944年から68年までのフランスに特有のものとしたことに基づいている。その後も、クリスチャン・キースリーの『シネフィリアと歴史』(Christian Keathley, *Cinephilia and History, or The Wind in the Trees*, 2006)をはじめ、シネフィリーの古典的ないし現代的なあり方をめぐる議論は枚挙に暇がない。「理論」以前の時代に改めて目を向けようとするこうした動向は、デイヴィッド・ボードウェルが、オティス・ファーガソンやジェイムズ・エイジャーをはじめ、1930年代から40年代にかけて活躍した4人のアメリカの映画批評家を取り上げた著書『吟遊詩人たち』(David Bordwell, *The Rhapsodes*, 2015)にも反映されている。

2. 研究の目的

以上の学術的動向を背景として着想に至った本研究は、ヌーヴェル・ヴァーグ誕生前後のおよそ四半世紀(1944-68年)のフランスにおける映画批評の展開とその影響に目を向ける。とりわけ、学術的な映画学(フィルム・スタディーズ)が確立される以前の1950年代までの時期の言説に着目し、そこで古典的シネフィリーがどのような諸問題に向き合っていたのかを掘り下げ、またそれらの諸問題が後年の批評や理論や作品にどのように影響したのかに光を当てるのが研究の目的となる。

この時期の最も重要な批評家はバザンだったので、本研究でもまずバザンの批評の読解を中心に据えて、彼が身を置いていた映画文化の状況、さらにはより広範な知的風土にも十分に気を配るべく『レクラン・フランセ』(1945-53年)、『ラ・ルヴュ・デュ・シネマ』(第二期、1946-48年)、『カイエ・デュ・シネマ』(1951年創刊)、『ポジティブ』(1952年創刊)といった主要な映画雑誌の初出誌を調査しながら、以下のような、当時の映画批評における論争的なトピックに注目する。

- ・ 映画というメディウムの特徴がモンタージュにあるのか、現実を撮ることにあるのかという、リアリズムをめぐる論争
- ・ オーソン・ウェルズやアルフレッド・ヒッチコックをはじめとするハリウッドの新しい「作家」たちをめぐる作家主義的な論争
- ・ イタリアのネオリアリズムをどのように評価するかをめぐる見解の相違
- ・ イデオロギー批評と形式に着目する批評の対立

- ・ 新しいアヴァンギャルド観の登場
- ・ 「脚色」(アダプテーション)された映画にどのように独自の価値を認めるかという問題
- ・ ジャン・ルノワールやロベール・ブレッソンをはじめとするフランスの映画作家の評価
- ・ シネフィリーに基づく批評という営為と、アカデミズムによる映画の心理学的・社会的な分析の対立
- ・ テレビをはじめとする新しいテクノロジーに対する反応 等々

こうした古典的シネフィリーの時期における批評がどのように継承されたのかについては、とりわけ、現在も継続刊行中の『カイエ・デュ・シネマ』誌を一つの軸に据えつつ、ジャン＝リュック・ゴダールをはじめとする何人かの人物をケーススタディ的に検討する。

3. 研究の方法

本研究を遂行するための方法は、もっぱら文献調査である。検討対象とする論争的トピックに即して、未見の関連作品を入手・視聴しながら、コーパスとなる雑誌記事や単行本を収集、読解、分析し、随時、論文の執筆、主要テキストの翻訳、学会発表などを通じて研究成果の社会的発信を行うことの繰り返しとなる。

1950年前後の映画批評の主戦場は雑誌であり、単行本化されていない文章も大量にあるため、*La Critique de cinéma en France* (dir. Michel Ciment et Jacques Zimmer, Ramsay, 1997)などを手引きとしつつ、主要な映画雑誌へのアクセスを確保することにも傾注する。具体的には、先にも触れた雑誌に加えて、『シネクラブ』Ciné-club (1947-51年)、エリック・ロメールのシネクラブの会報『ラ・ガゼット・デュ・シネマ』*La Gazette du cinéma* (1950年)、ジル・ジャコブが創刊した『ラコール』*Raccords* (1950-51年)といったよりマイナーな雑誌のほか、『サン・シネマ・デプレ』*Saint-Cinéma-des-Prés* (1949-50年)、『ラージュ・デュ・シネマ』*L'Age du cinéma* (1951年)といった、執筆者の人脈的に後の『ポジティブ』につながる雑誌にも即座にアクセスできる環境を整える。

4. 研究成果

本研究の成果は、(1)バザンの多面的な仕事を同時代の映画批評のコンテキストに照らして紹介・読解したものと、(2)古典的シネフィリーの時期における批評の継承を扱ったものに大別できる。

まず、(1)については、主として以下の5点が挙げられる。

- ・ バザンの最初期(1940年代半ば)の活動、特に彼のリアリズム論の基盤をなす最重要の理論的テキストといえる「写真映像の存在論」に焦点を絞り、2015年に公表されたその草稿の一部(「写真映像の存在論[草稿]」)の翻訳・注釈・解題、そして同テキストと密接な関連をもつ二篇の記事(「現実主義的な美学のために」「リアリズムについて」)の翻訳・解題を手がけた。その上で、特に上記の草稿の生成研究的な読解を中心に据えた論考「パランプセスとしての「写真映像の存在論」 マルロー、サルトル、バザン以前のバザン」を執筆した(すべて『アンドレ・バザン研究』第2号所収、6-55頁)。また、「写真映像の存在論」に関しては、別途、同論考における運動と不動のテーマをめぐる研究発表も行った。
- ・ 同じくバザンが最初期に執筆した、アンドレ・マルローの唯一の映画監督作『希望』(1939/45)についての長文の批評「『希望』あるいは映画におけるスタイルについて」を訳出し、その解題において、マルローの映画作品の製作経緯を跡づけつつ、バザンの映画批評が「写真映像の存在論」のみならず、「映像の修辞学」とも言いうるまったく異なる関心にも根ざしていることを示唆した(『アンドレ・バザン研究』第4号所収、61-82頁)。
- ・ 1940年代後半の映画批評における論争的なテーマの一つであった「脚色」について、当時の言説的な布置を確認しつつ、バザンが1948年の重要論考「脚色、あるいはダイジェストとしての映画」において、文学作品から映画への「脚色」が軽んじられる当時の一般的な状況にどのように抗っていたのかを、同論文の翻訳および解題を通じて確認した(『アンドレ・バザン研究』第3号所収、64-80頁)。
- ・ バザンが映画に描かれた「収容所」というモチーフに対してどのようにアプローチしているのかを、ヴァンダ・ヤクボフスカ『最後の宿营地』、アルフレッド・ラドク『長い旅路』、アラン・レネ『夜と霧』の三篇の映画評の訳出、およびそれを批評史的に位置づける解題論考「リアリズムの臨界 バザンと収容所映画」によって明らかにした(『アンドレ・バザン研究』第5号所収、114-137頁)。
- ・ バザンが戦後のアカデミズムに登場した学際的な映画研究プログラムであるフィルモロロジーが個別の映画作品を等閑視するさまを激烈に批判した「フィルモロロジーのフィルモロロジー序説」を訳出し、そのコンテキストを整理した解題「批評と研究 バザンのフィルモロロジー批判」を執筆した(『アンドレ・バザン研究』第6号所収、83-101頁)。

なお、研究分担者として参画した別の研究課題「アンドレ・バザンの映画批評の総合的再検討」においては、上記の個別の成果を生み出すための研究というよりは、『アンドレ・バザン研究』第2号の特集「存在論的リアリズム」、第5号の小特集「バザンと収容所映画」、第6号の特集「バザンの批評的实践」の取りまとめ、および第3号、第4号、第5号の共同編集を行うこと

で二つの研究課題の棲み分けを行っている。

続いて、(2)に関する研究成果は、主として以下の7点に纏められる。

- ・ 1950年代に映画批評家として活躍し、その後、ヌーヴェル・ヴァーグの映画監督となったゴダールに照準を合わせて、1950年代のフランス映画批評における「ヒッチコック論争」がどのようにゴダールの後年の作品（とりわけ『映画史』）に笈しているか、という観点も含めた学会発表「ゴダールの読むヒッチコック 『映画史』のヒッチコック読解をめぐって」を行った。
- ・ ゴダールの最新作『イメージの本』（2018）を仔細に読み解き、もっぱら過去の映画の引用によるコラージュによって構成される本作が、どの程度まで、ゴダール自身の過去の活動、とりわけ1950年代の批評活動に由来しているのかを考察し、その成果の一端を日本公開時の劇場パンフレットへの執筆や、論考「「ピクチャレスク・ゴダール 『イメージの本』における絵本の論理」などで披露した。
- ・ ジャン＝マリ・ストロープとダニエル・ユイレの映画が、バザンの存在論的リアリズムと、その特異な脚色論を引き継ぎ、実作において拡張していることを論じた論文「ストロープ＝ユイレとアンドレ・バザン 存在論的リアリズム、脚色、超＝演劇」を発表した。
- ・ バザンの映画批評を引き継いだ後続の批評家たちの一人といえるシャルル・テッソンによるマノエル・ド・オリヴェイラ監督『縞子の靴』（1985）論「恋情のオデュッセイア」を翻訳紹介した。
- ・ フランス映画批評・理論の流れとも密接な関連のあるロラン・バルトを取り上げて、そのいくつかの映画論を正面から読み解いた論考「映画への抵抗と「恋する距離」 ロラン・バルトの映画論をめぐって」を発表した。
- ・ ヌーヴェル・ヴァーグの再来とも言われた映画作家レオス・カラックスが、キャリアの最初期の1970年代末に『カイエ・デュ・シネマ』誌に短期間執筆していた批評を、1960年代初頭の批評のあり方を継承するものとして読み解いた（「批評家カラックスの肖像 スタローンとゴダールの間で」）。
- ・ 古典的映画論から映画批評を経て、フィルム・スタディーズや哲学的な映画論まで、独自のやり方で映画を論じてきた21名の人物を取り上げ、その所説を紹介する概説書『映画論の冒険者たち』（堀潤之・木原圭翔編、東京大学出版会）を共同で編纂し、個人としては、1950年代末から映画批評を手がけ、60年代半ば以降のフランスにおける映画理論を牽引したレーモン・ベルールと、バザンをはじめとする映画批評の伝統を批判的に捉え直しているジャック・ランシエールの章を執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 -
2. 論文標題 ブレヒトへの原点回帰 松村浩行《YESMAN / NOMAN / MORE YESMAN》に寄せて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『松村浩行レトロスペクティブ』カタログ（田中晋平編、国立国際美術館）	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 -
2. 論文標題 批評家カラックスの肖像 スタローンとゴダールの間で	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『レオス・カラックス 映画を彷徨うひと』（フィルムアート社）	6. 最初と最後の頁 414-427
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンドレ・バザン（堀潤之訳・解題）	4. 巻 6
2. 論文標題 フィルモロジーのフィルモロジー序説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 83-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 52-13
2. 論文標題 ペドロ・コスタとジェイコブ・リース 「画面外」への誘い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 281-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 314
2. 論文標題 映画への抵抗と「恋する距離」 ロラン・バルトの映画論をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央評論	6. 最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 5
2. 論文標題 リアリズムの臨界 バザンと収容所映画	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 シャルル・テッソン (堀潤之訳)	4. 巻 -
2. 論文標題 恋情のオデュッセイア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『『縞子の靴』上映記念カタログ』(アテネ・フランセ文化センター)	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 10
2. 論文標題 ピクチャレスク・ゴダール 『イメージの本』における絵本の論理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エクリヲ	6. 最初と最後の頁 102-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 -
2. 論文標題 映画作家のアトリエ エッセイ映画としての『JLG / 自画像』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジャン=リュック・ゴダール『JLG / 自画像』(Blu-ray) 封入リーフレット、アイ・ヴィー・シー	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンドレ・バザン (堀潤之訳・解題)	4. 巻 4
2. 論文標題 『希望』あるいは映画におけるスタイルについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷憲一郎・堀潤之	4. 巻 101
2. 論文標題 稲畑勝太郎のリュミエール兄弟宛て書簡4通の発見について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 177-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ダドリー・アンドルー (木下千花・堀潤之訳)	4. 巻 3
2. 論文標題 この残酷な世界へのバザンのインテグラルな視座	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 6-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンドレ・バザン（堀潤之訳・解題）	4. 巻 3
2. 論文標題 脚色、あるいはダイジェストとしての映画	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 64-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 -
2. 論文標題 ストロープ=ユイレとアンドレ・バザン 存在論的リアリズム、脚色、超=演劇	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 渋谷哲也編『ストロープ/ユイレ シネマの絶対に向けて』（森話社）	6. 最初と最後の頁 303-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンドレ・バザン（堀潤之訳・注釈・解題）	4. 巻 2
2. 論文標題 写真映像の存在論 [草稿]	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 2
2. 論文標題 パランブセストとしての「写真映像の存在論」 マルロー、サルトル、バザン以前のバザン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6. 最初と最後の頁 30-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 -
2. 論文標題 ゴダールの読むヒッチコック 『映画史』のヒッチコック読解をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本映画学会第13回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀潤之	4. 巻 49-17
2. 論文標題 「革命」の映画論 蓮實重彦のゴダール論をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 201-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 引用映画から読む『イメージの本』
3. 学会等名 出町座映画講座：ゴダール・レッスン2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 「写真映像の存在論」再考 アンドレ・バザンにおける運動と静止
3. 学会等名 アンドレ・バザン研究会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 「写真映像の存在論」再考 アンドレ・バザンにおける運動と静止
3. 学会等名 映画批評フォーラム（釜山シネマセンター）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 バザンと「作家主義」の差異をめぐる3つの視点
3. 学会等名 アンドレ・バザン研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 「写真映像の存在論」論の系譜
3. 学会等名 アンドレ・バザン研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 収容所のイメージ 映像アーカイヴの臨界点として
3. 学会等名 国際シンポジウム「イメージの時空間 映像アーカイヴの多角的展開にむけて」（東北芸術工科大学主催）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀潤之
2. 発表標題 ゴダールの読むヒッチコック 『映画史』のヒッチコック読解をめぐって
3. 学会等名 日本映画学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 堀潤之、木原圭翔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 映画論の冒険者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

les signes parmi nous (研究代表者の個人ブログ) https://tricheur.hatenablog.com/ Cahiers Andre Bazin (アンドレ・バザン研究会ブログ) http://cahiersandrebazin.blogspot.com/

6. 研究組織			
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)		備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------